

## 投稿

## 凶兆としての流星

臼井 正（京都学園大学）

## 1. はじめに

筆者が天文に興味を持ったきっかけは、中学1年生の夏にペルセウス座流星群を見ようとしたことだった。観測に備えて、夏の大三角やさそり座など夏の星座を覚えていったので、今から思うとあまり分かっていなかったのだが、ともかくそれから星座を覚えて、天体望遠鏡で色々な天体を見て、高校・大学のサークルでも流星観測を続けていた。

流星が流れている間に3度願いごとをすると、それが叶うという言い伝えは有名だが、世界各地の流星の伝承を調べていくと、それは少数であることに気づいた。そこで、流星に加えて隕石の伝承を2回シリーズで追っていくが、今回はその内の流星編である。ここでは、科学としての流星ではなく、人々がこれらの天文現象をどのように捉えていたかを探っていきたい。

## 2. 流星の民俗学

「星は、すばる。」ではじまる有名な『枕草子』の星の段は、「ひこぼし。みやう星。ゆふづつ。よばひ星、すこしをかし。尾だになからましかば、まいて（尾さえなければ更にいのに）。」と続く。「みやう星（明星）」は明けの明星、「ゆふづつ（夕づつ）」は宵の明星で、よばひ星が流星のことである。「よばう」は「呼ばう」で、恋人の名を大きな声で呼ぶ、ひいては正式に結婚を求めることを意味するようになった。平安時代の漢和辞典『和名類聚抄』でも流星の和名として「与波比保之（よはひほし）」とある。ヨバイボシは流星の和名としても東京、大阪、福井など各地に残っており、沖縄でもユーバイボシと呼ばれる。静岡県ではホシノヨメイリといい、他の星に嫁

入りすると見てヨメッタというそうだ。富山県では逆にインキリボシ（縁切り星）というが、これは「流星は天の神様に憎まれて星の仲間から追い出されたもの」だからである（『日本星座方言資料』[1]；本書は昭和初期に静岡県を中心に星の和名と伝承を集めた労作である。流星の和名と伝承については、「星の民俗館」[2]も参照した）。

『枕草子』で「よばひ星、すこしをかし。」に続いて、「尾だになからましかば、まいて」とある中の「尾」は流星痕（流星が流れた後に残る雲のようなもの）のことだと思われる。尾があることから、よばひ星を彗星とする説もあるが、同時代の他の記録にも「大流星あり…その尾二丈ばかり」や「流星あり…色白く尾短し」などとあることから、やはり流星だろう。特に、『三代実録』の貞観十三（871）年八月二十三日条には、「大流星有り。…入りて後、その尾白く、しかして曲環す。」とあるが、これは永続痕（流星が流れた後も雲のように残る流星痕）が高層大気に流されて曲がっていったことを記述したのではないかと考えられる。

他にも流星の和名として、オチボシ（落ち星）、トビボシ（飛び星）、ヌケボシ（抜け星）など流星の動きを表した名前が静岡県で集められている。面白いところでは、青森や佐渡のホシクソ（星糞）、沖縄のホシヌクス（星の糞）という呼び方もある。『和漢三才図会』[3]は江戸時代の図入り百科事典で、流星の項にもさし絵があるが（図1）、別の「星隕（おちて石と成る）」の項には、「日本の陸奥（青森県）、出羽（秋田県）に夏の晴れた夜、星が落ちた。…おちた処にもものがあり、（葛餅（くずもち）の一盃（ひとわん）くらいで）、星屎（ほ

しくそ)と名づけた」という話が載っている。ただ、和名のホシクソについては、[1]で「流星は星のたれた糞が流れて落ちてくるものと信じられて、かう呼ぶので、隕石となつたものを指すのではないらしい。」とあるので、流星と隕石の両方の呼び名だったのかもしれない。



図1 『和漢三才図会』[3]の流星のさし絵

流星の伝承には、「星が流れると人死がある。」(群馬県多野郡)、「流れ星を見たら「ヒトダマが飛んだ」という」(埼玉県大里郡)など不吉なものが多い。八重山地方の竹富島でも、流れ星をヒトウダマーと呼んでいる。又、「流星の青色なのを人魂といい人が死ぬと飛ぶ。赤色なのを金魂といい福が授かる」(静岡県庵原郡)というように流星の見え方によって禍福が分かると考えたり、流星を見たら「唾を三度せぬと親が死ぬ」(静岡県田方郡など)というように、不吉ではあるが被害の避け方を教えている場合もある。

「流れ星が自分の方に向かってくればお金が入る」(埼玉県所沢市)などと、流星を吉兆とする伝承もいくつかある。[1]では、流星が流れている間に言葉を三回唱えるとそれが叶う、という伝承も各地から集められているが、その言葉としては「千両拾った」(静岡県

小笠郡)や「読み、書き、算盤」(福岡県築上郡)など時代を感じさせるものが多い。

更に、「流星が続くと天気がよい」(岩手県東磐井地方)や「流れ星が東に向かって飛ばば風、南へ飛ばば晴、西へ飛ばば雨、北へ飛ばば雲や霧が起きる」(富山県小矢部)など天候に関するものもある。『和漢三才図会』[3]でも『万宝全書』を引いて、「流星が東より西に向かって移れば翌日は雨がふる。東から南へ向かって移れば翌日は火災がある。東から北に向かって移れば七日の内に、強盗が押し込み強盗を働く。南から東に向かって移れば旱(ひでり)となり、南より北に向かって移れば翌日は霧。…」と、流星を気象のほか、火災や強盗といった凶事とも結び付けている。

日本だけでも、これだけ多様な流星の呼び方と伝承があったが、現在の流星のイメージとかけ離れているものも多い。又、[1]と[2]で集められた流星の伝承の数は彗星のそれよりも多く、それだけ生活に密着した天文現象だったといえるだろう。

### 3. 『更級日記』の人魂

『更級日記』は、国司の娘として生れた菅原孝標女(すがわらのたかすえのむすめ; 1008年-没年不詳)の回想の手記である。「あづま路(東路: 京都から関東への道)の道のはてよりも、なお奥つ方に生い出でたる人」だった彼女は、13才で上京して源氏物語を読みふった。そして、33才という当時としては遅い結婚、出産をする。ここで問題にしたい人魂は、作者が50才になった天喜五(1057)年、夫が国司として信濃へ赴任するところに登場する(作者は京都に残った)。

見送りに行った家人(けにん)たちが帰ってきて、「たいそうごりっぱにお下りでした」などと言って、「この明け方に、非常に大きな人魂が空に現れ、京の方へ飛んでいきました

(この暁にいみじく大きな人だまのたちて、京ざまへなむ来ぬる)」と報告したが、私は、供の者の誰かの人魂だろうと思っていた。およそ、不吉な前ぶれなどとは思ってもみなかった。(犬養廉訳[4])

その翌年、夫は国司の任期(4年間)を全うせずに京都に戻り、そのまま亡くなってしまったので、文中の「不吉な前ぶれ」は、夫の死を意味している。この箇所の人魂の注としては、「人の魂が抜け出して飛ぶ火の玉。人の死の前兆として忌まれた」[4]とあり、筆者が見た範囲では他の文献でも同様だった。しかし、『更級日記』は比較的淡々とした記述が続き、怪奇的な要素は夢占い以外にはほとんど無い。

流星の和名として人魂があったことは先に紹介したが、歴史書の中にも例えば、

流星、良(うしとら;東北)を差して渡る。俗に人魂というなり。『扶桑略記』延長八(930)年七月十五日条

光り物あり。暫く北天を照らして南方に行き、地に墮つ。天は岡の如く所々に曜(かがや)く。諸人これを見る。或いは人魂といい、或いは流星という。『吾妻鏡』建保元(1213)年六月二十九日条

などとあって、『更級日記』の前後の時代にも、流星を人魂と呼んだ例があったことが分かる。

次に、人魂が飛ぶ高さについて考える。民俗学で報告された人魂の目撃例では、人魂はあまり高いところを飛ばず、「屋根の上に飛んでいった」とか、「あぜ道に沿って飛んでいった」という表現をとる(その正体はさておいて)。古典では、人魂が「北壺呉竹のあたり(北の庭の竹が生えているところ)」に飛んだ(『明月記』正治二(1200)年三月五日条)、といった表現がこれに当たる。一方、『更級日記』

の「京ざまへなむ来ぬる(京都の方へ飛んでいった)」という書き方は、もっと高いところを飛んだ感じがする。

歴史書での流星が飛んだ方向の表現としては、方角(「東より西へ」)や星座名(「(北斗)七星より出づ」)が多いが、中には

流星、紀伊山方に出で福原(現在の神戸)東北の山に入る。『百練抄』治承四(1180)年十月七日条

三笠山に大なる光物あり。『玉葉』養和元(1181)年九月十七日条

と地名を使った例もある。そこで、『更級日記』の時代に流星を人魂といった例があること、「京ざまへなむ来ぬる。」という表現は流星のように高いところを飛んだ感じがすることから、『更級日記』の人魂は流星の可能性が高いと考えている。『枕草子』で、よばひ星について、「尾だになからましかば、まいて」と言っているのも、流星痕のあるような大きな流星は人魂かもしれないから恐い、といった気持が働いたのかも知れない。

#### 4. 日本史の中の流星

流星は日本の歴史書では、光り物、天変などと呼ばれることもあった。『日本天文史料』[5]にまとめられている流星記事から世紀別に呼び名の統計をとると、図2のようになる([5]では1つの流星ごとに1つの史料から抜き出した小見出しがあり、その後に複数の史料からの抜粋が網羅されているので、1つの流星について複数の呼び名がある場合がある。ここでは単純に小見出しに記された呼び方を集計した。江戸時代については、『流れ星の文化誌』[6]の集計を用いた。世紀の後の()内の数字は、流星記事の数を示す)。

これを見ると8世紀以前は「星流れる」や「星隕(お)つること雨の如し」といった表

現が多かったが、9世紀には「流星」という呼び方が主流になった。「流星」はその後の時代も使われ続けるが、その頻度は減少する傾向にある。そのかわりに「光り物」と呼ばれることが多くなり、14世紀を中心にした一時期には「天変」という表現が流行している。時代と共に呼び方がこれだけ変わった天文現象は、流星くらいではないだろうか。

ものもことごとく減刑とし、また二十一社に奉幣し、仁王会を催して祈祷が行われた（[7]が引く『日本紀略』の記事）。

流星は日蓮（1222-1282）とも関わりがある。蒙古襲来を予言して勢いづいた日蓮は、法華経にもとづく政治を目指して幕府批判を強めたが、文永八（1271）年に捕えられ、佐渡に流罪と決まった。しかし、これは表向きで、実は途中で斬首するはずだった。日蓮が鎌倉を発ち竜口（たつのくち）に到り、武士に首を切られそうになったとき、「江の島の方より月の如くなる光りもの鞠（まり）のやうにて、辰巳（たつみ）の方（東南の方角）より戌亥（いぬい；北西）へ光り渡」った（『年・月・日の天文学』[8]所引の「種々御振舞御書（しゅじゅおふるまいごしょ）」）。これを見た武士は恐れて走り去り、日蓮は命拾いをしたという（竜口の法難と称される）。

この光り物について、広瀬秀雄氏は[8]でエンケ彗星由来のおひつじ・おうし座流星群の一流星が出現したのだと解釈している。一方、『日蓮』[9]では「光り物の叙述は「種々御振舞御書」と弘安元（1278）年の「妙法尼御返事」だけであって、その他の遺文には無く、しかもこの両書は真蹟が現存しないので多分に疑問の余地がある。」としている。この引用文中の二書とも日蓮が書いたものとされるが、現物は残っておらず、他の現存する日蓮の自筆の書には、光り物には触れずあっさりと言われているらしい。日月食と違って、流星の出現は今となっては検証のしようがないが、当時、流星が日食・月食や彗星とともに恐れられていたからこそ、こうしたエピソードが広まった（又は、作られた）、ということと言えるだろう。

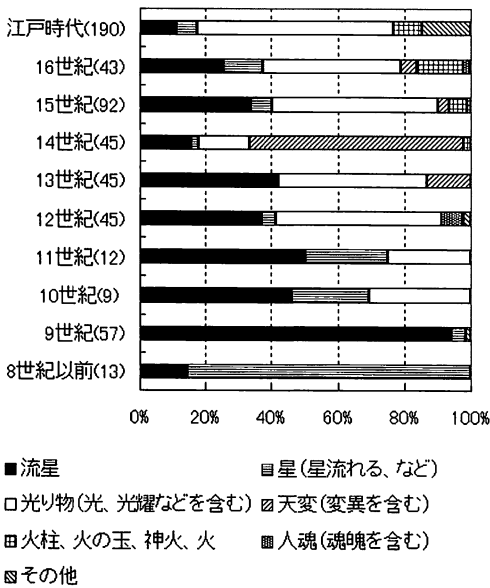


図2 日本での流星の呼び名の変遷

康保四（967）年九月九日には、しし座流星群の日本での最初の記録があり、『扶桑略記』では、

亥の時（午後十時）より始まり、寅の時（翌日の午前四時）まで、普天の下、衆星東より西へ流る。走散して間なし。形刀剣の如し。（『星の古記録』[7]）

と記している。その68年後、つまり2周期後の長元八（1035）年にも大出現した。その時は、流星雨のために天下に大赦を行い、死罪以下の罪で、つねには赦（ゆる）さなかった

## 5. 中国の伝承と天狗星

中国では新しい王朝が興ると、前の王朝の歴史をまとめた歴史書（正史）が編纂されたが、その中の「天文志」には詳細な天文記録が残されている。天文記録といっても現代的な意味での天文観測を目的としたものではなく、政治の良し悪しに応じて、天が示したしるしとして解釈するのが目的だった。

唐代に成立した『晋書』「天文志」[10]は正史の中でも特に詳しいが、その中には「流星は天の使者である。…星の大きなのは任務が大きく、星の小さなのはその任務が小さい。…はじめに大きくて後に小さくなるのは、その用事が憂いごとであり、はじめ小さくて後に大きくなるのは、喜びごとである。…」とある。流星の名前としては、地雁(ちがん；小さな流星に似ていて、青赤色のもの)、天雁(てんがん；青赤色の光があり、二、三丈の長さのもの)、枉矢(おうし；流星に似ていて、蒼黒色で蛇行する。「枉」は曲がるの意味)など10種類以上を挙げている。

その他、天狗という呼び名も挙げているが、これについては、「星に毛があり、まわりに短い尾があり、下の方は狗(いぬ)の形をしている」という、本当に見たことがあるのか分からないような説明をして、これが現れると、「千里の遠くでも敵軍をうち破り将兵を殺す」とか、「その星が進行する先の土地では流血があり、その君主は領土を失い、兵乱が大いに起こる」としている。明代の『五雜俎』[11]には、「俗に「天狗星の止まるところでは、夜に人家の小児を食べる」といい、それ故、婦女や嬰兒はこれを忌むことが多い」とあり、ここでは天狗星が悪霊の一種のように捉えられている。

天狗星は『晋書』「天文志」や『史記』「天官書」の他にも、日本で年月日の確かな流星の初出記事に登場する。

舒明(じょめい) 天皇九(637)年二月二十三日戊寅、大いなる星東より西に流る。すなわち音ありて雷に似たり。時の人いう「流星の音なり」と。またいわく「地雷(つちいかずち)なり。」と。ここにおいて僧旻(みん)法師いわく「流星にあらず。こは天狗(あまつきつね)なり。その吠ゆる声雷に似たるのみ。」と。([7]所引の『日本書紀』卷二十三)

僧旻は渡来人の子孫で、小野妹子を大使とした最初の遣隋使で中国に渡り、帰国してからは大化の改新後の朝廷で活躍した。ただ、彼の天狗星の説明はあまり的確なものとも思えないが、留学の成果を示したかったのだろう。この記事の中では流星に音が伴っていたとされるが、現在、隕石の落下時に衝撃波による音がする場合のあることが知られている。流星の出現と同時に音がしたという報告もあるが、流星は100km以上の高さで発光しているので、光と同時に音が地上に達するとは考えにくく、流星の音の真偽や正体は謎のままである。ちなみに、天狗(てんぐ)は、この天狗星に由来するとされるが、鼻が高く赤ら顔という現在の天狗のイメージは中世以降のものである。

再び『晋書』「天文志」に戻るが、その中の流星雨の記録例としては、「晋の武帝の泰始四(268)年七月に、雨のように星が降った。みな西方に流れた。占によれば、「隕星は人びとが反乱することで、西方に流れたのは、天下が晋に帰属する象徴である」と。その後二年して、呉の夏口都督である孫秀が部下二千余人を率いて投降してきた。」[10]というものが、三国志の一角だった呉の衰退と関連づけている。ただ、孫権の弟だった孫秀の投降は流星雨の出現から二年も経っている。

『晋書』「天文志」で分類された流星のほとんどは凶兆とされるが、天保(流星の類で、

音を立てて炬火(のろし)のように地平に落ちてゆき、野雉が鳴きたてる)だけは、それが落ちた国に喜びごとがある、としている。又、司馬遷の『史記』「楽書」[12]には、「漢の帝室は常に、正月上旬の辛(かのと)(十干の8番目)の日に太一(北極星)を甘泉宮でお祭りする。…祭りにはいつも流星が祭壇の上を流れ、…」とあるので、流星が常に恐れられていたわけではないらしい。しかし、実際に出現した流星についての占いでは、やはりほとんどの場合で戦争や飢饉の前兆とされた。

『流星の文化誌』[6]では、中国での流星の呼び方について統計を取っている。それによると、全時代を通じて「流星」という呼び名が見られるが、時代によって枉矢(4世紀頃)、天狗(10世紀頃)、客星(13世紀頃)、火・火星(16世紀頃)といった呼び名が一時的に広まっていたので、日本と同じように基本は「流星」だったが、時代によって流行があったといえる。

## 6. 西洋古代の流星

ここから目を西洋に転じるが、英語で流星はshooting star、学術的にはmeteorである。Oxford English Dictionaryによると、meteorはもとは「空の高いところにあるもの」の意味で、上や後を表わす接頭辞メタ:metaに由来し、古くは、風、雨、オーロラ、虹、雷光なども表わしていた。これらを区別するときには、「空気の」airyや「水の」watery、「明るい」luminousといった形容詞をつけてairy meteor(風)、watery meteor(雨、雪)、luminous meteor(オーロラ、虹)などといった。流星は「火の」fieryがついて、fiery meteorとなるが、これには雷の意味もあった。又、meteorite(隕石)や、meteorology(気象学)も同じ語源である。ギリシアの世界遺産メテオラも「中空の」という意味で、大地から突き出た奇岩群の上に、修道院がいくつ

も建てられている(図3)。



図3 メテオラのアギオス・ステファノス修道院 [13]より

古代ギリシアのスパルタで、流星が政治に影響を与えた例を、フレイザーの『金枝篇』[14]から引用する。

スパルタの規則には、八年目ごとに民選長官たちは月のない晴れた夜を選んで坐り、静かに空を観なければならぬというのがあった。もしその徹夜の間、隕星つまり流れ星を見たなら、彼らは王が神に対して罪を犯したのだと断定して、デルポイの神託かオリュムピア一の神託が王の復位を許すまでその機能を停止するのであった。スパルタの君主政治の最後の時期においてすら、この慣習は太古さながらの面影をもっていて、一片の死文と化してはいなかった。というのは、紀元前第三世紀のこと、革新派に嫌われたある王が、種々虚構の告訴にもとづいて実際に黜(しりぞ)けられたのであるが、空に不吉の兆が見えたという申立てが告訴理由の主なものであったのである。

これは中国と同じく、流星を政治の乱れを示す天のお告げと考えたものである。しかし、流星は晴れている夜に一晚中観測すれば必ず見えるので、この規則を厳密に守っていたら、全ての王に罪があったことになっただろう。

古代ローマのプリニウスは『博物誌』[15]

の中で、流星の呼び名としてランパス(松明)、ボリデス(火球; 英語のbolideに相当)、トラベス(梁)の他に、カスマ(裂け目)を挙げて、「空そのものに裂け目が生ずることがあり、これはカスマ<裂け目>と呼ばれる。」と説明している。これは天は硬い殻でできていて、その外側は光に満ちている、という素朴な考え方が背景にあると思われる。

プリニウスは別の箇所でも、「星があちらこちらへ飛ぶように見えることがあるが、これは間違いなくその方角から大暴風が起こる凶兆である。」([15])とも記している。プトレマイオスが著した占星術の集大成である『テトラビブロス』[16]にも、「流星が一方向からやって来れば、その方向から風が吹くしである。しかし、反対の方向からもやって来るなら、風が吹き乱れるしである、さらに全ての方向から飛ぶなら、雷や稲妻を伴ったあらゆる種類の嵐になるだろう。」とある。

さらに古代メソポタミアの天文占いの文書『エヌマ・アヌ・エンリル』(現在発見されている文書は紀元前7世紀のものだが、内容自体はそれよりも大幅に遡ると考えられている)にも、「閃光を放つ星は、風が吹くしである」とか、逆に「上から落ちてくる星は、風がおさまる(? : 原義不詳)しである」と、日本の伝承と同じく(2章参照)、流星を気象と関連させる見方も広くあった。

プリニウスの『博物誌』では、他にも

われわれはすでに、星というものは天空に附着しているものであって、俗衆が信じているように、われわれの個人個人にそれがあてがわれていて、…各人の運命に応じて、明るさの度合いによって星が分配されている、というのではないということを述べた。星はいずれもそれらに結びついている人間とともに昇るものでもないし、それが墜ちたからといって誰かの生命が消えかかっているのでもな

い。星の輝きがその運命をわれわれの死の運命とともにするというような密接な連繋もわれわれと天空の間にはない。([15])

と記していて、逆に当時このような考え方が広く信じられていたことが分かる。

## 7. 西洋中世以降の流星

流星を人の死と結び付ける考え方は、中世以降のヨーロッパでも広く信じられていた。

「夜に星が流れたら、あなたの友の1人があの世にいったと思いたまえ。なぜなら、人はめいめい空に自分の星をもち、人が死ぬとその人の星も流れていくのだ。」これは行商売りの文学のベストセラーのひとつ『蒲(がま)の福音書』のくだりだ。多くの地方で、流星を見たならば、天国の門が開かれ、死者の魂が救われるように祈りなさいと言い伝えられている。というのは、普通その魂は贖(あがな)い(罪のつぐない)を終えてまっすぐ天に昇る魂なのだ。([17])

引用文中の『蒲の福音書』ではプリニウスと同じく、星と人間は対応関係にあるが別のものと考えているのに対し、後半では日本の人魂と同じように、流星を人間の魂そのものだと考えているようだ。

[6]にも、

「カトリックの教徒は流れ星を靈魂とみなしていた。天国に行けない靈魂は煉獄(れんごく)に止まって罪を償い、誰か流れ星を見た人が祈りを捧げてくれることにより救われるようになるのを、その煉獄で悩みながら待つのである。そして幸運にもその望みがかなった場合、魂は煉獄から天国へ移ることができる。流れ星が消えるまでに「Rest In Peace」と三回唱えるという言い伝えがあり、これは

このような背景を持ったキリスト教的な魂の救済を意味していたのである。」

とあり、これが流星が流れている間に3回願い事を言うと叶う、という現在の言い伝えの原型になったらしい。しかし、この段階ではまだ、流星は自分の願いごとではなく、誰かの魂と結びついている。

ケプラー（1571-1630）が旅の途中で病死して葬儀が行われた夜に、流星が流れたという記録も残されている。流星は晴れていれば毎晩見られるので、誰かの死の前後に流星があっても何の不思議もないが、わざわざ書き残すということは、やはり流星が死と結び付けて考えられていたのだろう。又、18世紀ロシアの女帝・エカテリーナ二世（1729-1762年即位-1796年）はドイツ出身だが、ロシアのロマノフ家に嫁ぎ、後に自身がロシアの皇帝になるという数奇な運命をたどった。彼女は晩年、発作が何回か起きようになっていたが、ある晩流星をみて「あれは死の予兆だわ」とつぶやき、その2ヶ月後に亡くなったという。

1833年にはアメリカを中心にしし座流星群の大出現が見られ、人々はパニックに陥った。特に、アメリカのウィリアム・ミラーが創設した教団では、世界の終わりが近いと唱え、『新約聖書』「ヨハネ黙示録」にいう世界の終りが来たのだと信じた。「ヨハネの黙示録」では、この世の終わりに七つの封印で封じられた巻物が子羊によって開かれるが、子羊が第六の封印を開いた。そのとき、大地震が起きて、太陽は毛の粗い布地のように暗くなり、月は全体が血のようになって、天の星は地上に落ちた。(6.12-13、新共同訳[18])とある。北方ルネサンスの巨匠デューラー（1471-1528）も「黙示録」の連作版画の一枚で、この場面を描いている(図4)。

このように近代になっても流星は死の前兆

と捉えられ、特に流星雨は世界の終末とされたのだった。



図4 デューラーの「黙示録」  
Courtesy of Connecticut College [19]

## 8. 世界の流星

世界のその他の地域では、流星はどのように捉えられていたのだろうか？ イスラム教の聖典『コーラン』[20]の「ジンの章」では、ジン（魔物）が言ったこととして

われわれが天にふれてみると、それは、強力な番人（天使のこと）と、光り輝く流星でいっぱいであることがわかった。

われわれは、そこに席をとって盗み聞くのが常であったが、今では、そうして聞こうとする者は、光り輝く流星が待ちかまえているのを見るだけだ。

とある。ジンがあまりに天国に近づきすぎると、彼らに向かって流星が放たれ、それがジンの主な死因になると考えられていた。特に8月と10月には多くのジンが撃たれ、それぞれペルセウス座流星群とおうし座流星群として見えるという(『魔の世界』[21])。

『占術大集成』[22]は6世紀のインドのヴァ



ラーハミヒラが書いた宮廷占星術のマニュアルだが、流星については  
プレータ（亡霊）、武器、騾馬（らば）、駱駝、  
鱧、猿、猪、魴、けもの（ムリガ）に似たもの、大とかげ、蛇、煙の形のもの、さらに頭を二つもつものは悪い。

旗、魚、山、象、紅蓮、月、馬、溶けた銀、  
鶯鳥に似たもの、如意樹文様（シュリーヴリクシャ）、金剛杖（ヴァジュラ）、巻貝、卍形  
のものは吉祥と豊作。

と、どれだけ実用性があるのか分からない分類をして、凶兆と吉兆に分けている。しかし、その後が続く個別の解説では、「空の中からたくさん落ちてくるものは王と王国の破壊につながる。空の上で震えているものは民の混乱を示している。」（[22]）というように、ほとんどが不吉なものばかりである。

現在の中央アメリカの先住民の多くは、流星と隕石をまとめて星の大便（又は、星の尿）と呼んでいるが、同様の呼び方は日本にもあった（2章参照）。彼らは他にも、虹の神のタバコの吸いさしや虹の神が放つ矢、イグアナの尻尾とも考えており、さらに、流星を指差すと、その腕が不治の病にかかるとも信じられていた。

アステカ人は、流星が人や動物に当たると、傷口からイモムシがわいてくると信じていたので、夜は注意して歩き、流星に傷つけられた動物を食べないように気をつけたという。これは流星をイモムシに見立てたことに由来するらしい（図5上）。アステカ帝国がスペインに征服される前にも、飛び散る火花のような流星が西から東に飛んで、3つに分裂した、という記録が残っており（図5下）、これも帝国滅亡の前兆のひとつとされた（“World Archaeoastronomy” [23]）。



図5 [23]所引のアステカのイモムシ流星（上；『ヴァチカン絵文書A』）とアステカ帝国滅亡前に現われた流星（下；『フィレンツェ絵文書』）

アフリカのケイタ族での流星の絵文字は、父の家を去って夫の家に嫁いだ花嫁を表わし、流星は「かわいい腰布の持ち主」と呼ぶので、日本のヨバイボシと同様の発想である（2章参照）。コイサン族（かつてのブッシュマンは蔑称だとして、現在はこう呼ばれる）は、流星を魔術的な力を持った生き物と考えていた。一部では流星をヤマアラシが食べ物を探しに地上へ降りてくる姿だと考えていたので、ヤマアラシの皮は「星の皮」と呼ばれ、その脂肪は病気を治す踊りでお守りとして身につけられた。そして、シャーマンが踊っている内にトランス状態に入ると、彼は先祖から魔術的な力を授かって流星として空を飛んでいくことができると信じられていたのだった。

ニュージーランドの先住民であるマオリ族にとって、流星は空をさまよって兄である太陽と月に撃たれた星だった。他には、彼らの首長の死を知らせる凶兆だと考えた他、自分に向かってくる流星は良いしるしだと信じている部族もあった。また、流星は天候を知らせる天の使者で、流星が下に流れると次の季節には風が吹き、逆の場合は豊かな実りが約束されているという伝承もあった。

オーストラリアの先住民・アボリジニは、流星のことを家から離れて死んだ人の魂が故郷に戻るものだとか、死者の魂をあの世へ運ぶ空のカヌーなどと考えていた。他の部族でも、体を盗んで血を吸う一つ目の悪霊(又は、蛇)が獲物を探している時に光る目が流星として見える、とやはり凶兆とされた。しかし中には、流星は子供の魂が、空から妻の所へやってくる良いしるしだと考えている部族もいた(この章の伝承で、別記なきものは、“Astronomy across Cultures” [24]所収の論文によった)。

このように世界各地の民族でも、流星を死や天候と関連させたり、悪霊や精霊の姿と考えたり、まれに吉兆とみなしたりしていたが、地理的にも文化的にも遠く離れているにもかかわらず、日本の伝承と似たようなものが多くあるのは興味深い。

## 9. 星に願いを

世界のほとんどの地域で流星は凶兆とされていたが、シベリアに住みシャーマニズムを信じる人々は広く、流星を幸運のしるしと考えていた。彼らは天をお椀を伏せた形をした硬い蓋だと考えており、『シャーマニズム』[25]には、

いくつかのチュルク系民族はさらに、神々が天の蓋をときどきちょっと開いて、地上に何が起きているかをのぞいて見るのだと考えている。そこでチュワシ(民族名)は流れ星が現われるわけを説明する。この、天の《裂け目》を見ることのできた者は運がいい。というのは、その瞬間に願いごとをしたり、神に頼みごとをすればすべてかなえられるからである。ブリヤート(民族名)は、《天の扉》を神々がちょっと開いた時に流れ星が現われるのだと言う。《扉》がほんの一瞬間でも開くと、「天から不思議な光が輝きわたって、大地の

すみずみまで照らし出す。」

とある。プリニウスの『博物誌』でも、流星の呼び名としてカスマ(裂け目)を挙げたので(6章参照)、ローマ世界でも同様な考え方があったが、そこでの流星は幸運のしるしではなかった。

現在、流星の伝承といえ、流れている間に3回願い事を唱えると叶う、という言い伝えしか思い浮かばないが、こちらはいつ頃から言われはじめたのだろうか? 『英語迷信・俗信事典』[26]によると、流れ星を「生命の死・災難」とする英語圏の伝承は、1595年のシェークスピア『リチャード2世』にある「天には流れ星が飛び交って、恒星をおびやかしています。これは王たちの死の前兆です。」というセリフ以降、各世紀の例が8つ集められている。一方、「願いが叶う」という伝承については5例挙げているが、1839年のアイルランドの歌謡集の「流れ星を見たので、心の願いをかけた。」が最初である。また、「生命の誕生」についての伝承もあり、1824年の「流れ星が落ちると、子供が生まれる。流れ星は子供が生まれた人の所に落ちると考えられている。」からはじまって、4例集められている。

そこで、「願いが叶う」という伝承はかなり新しく19世紀になってから、流星を死の前兆とする考え方が薄れて、新たな生命の誕生のしるし、さらには個人の願いごとへと変化していったのではないかと思われる。ただ、「3回願い事を唱えると」はカトリックのお祈りに起源があると思われるが(7章参照)、上掲書の5例の中で明確に言われているものはなかった。一方[26]では、1953年になっても「流れ星を見たら、誰かが死ぬということです。」という少女の言葉が採集されているので、こうした古い見方も根強く残っていたらしい。

## 10. まとめ

以上の流星の名前や伝承を、類型化すると次のようにまとめられる。

- ・異性のもとへ通う姿：日本の「よばいぼし」「ホシノヨメイリ」（2章）、アフリカのケイタ族（8章）
- ・人間の魂そのもの、又は人間の生死と対応するもの：日本（2章、3章）、ヨーロッパ（6,7章）、ニュージーランドとオーストラリアの先住民（8章）。中国でも、諸葛孔明が死んだときに星が落ちたとされるが、詳しくは次回に紹介する。オーストラリアの先住民（8章）や19世紀以降のヨーロッパ（9章）では死者の魂とみなす他に、生まれてくる子供の魂ともされた。
- ・天の使者、又は精霊・悪霊の姿：中国（5章）、アラビアのジンに向かって放たれるもの、中央アメリカ、アフリカのコイサン族、オーストラリアの先住民（悪霊の目として）（以上、8章）
- ・政治の乱れや戦争をしめすもの：日本（4章）、中国（5章）、古代ギリシアのスパルタ（6章）、アメリカでのしし座流星（7章）。インドの占星術とアステカ帝国滅亡前の流星（8章）。この見方は、宮廷に仕えた占星術師によるものが多く、民間では流星がもっと身近なもの結び付けられていたと思われる。
- ・星の尿や星の大便：日本（2章）と中央アメリカの先住民（8章）
- ・天候の予兆：日本（2章）、ローマ時代のプリニウスとプトレマイオス、古代メソポタミア（以上、6章）、ニュージーランドのマオリ族（8章）
- ・天の裂け目：ローマのプリニウス（6章）、シベリアの先住民（9章）

これらの伝承の中には、天狗星のように中国から日本へ伝播したことが明らかなものもある。しかし、同じ類型の伝承が地理的にも時代的にも遠く隔たった所でも見られるし、

日本をはじめとして同じ民族でも地方によって異なる伝承が数多くある。そこで多くの場合は、流星の見え方からの自然な発想として、各地域で独立に同じような伝承が生まれたのではないかと考えられる。伝承の中で流星を不吉なものとする見方が主流だったのは、流星のメカニズムが分かる以前は突然光る得体の知れないものとして、日食・月食や彗星などと同じく恐れられたためではないだろうか。

流星を吉兆とするのは、日本（2章）、中国（5章）、古代インドやニュージーランドの先住民（8章）に例があるが、伝承全体の中では少数派で、広く吉兆とされたのはシベリアの先住民（9章）くらいだった。

現在一般に言われる「流れ星に願いごと」という言い伝えについては、英語圏で確認できたのは19世紀以降で、それほど古いものではないと考えられる。日本へは、[6]で「無いものを証明することは非常に難しいが、「流れ星への三度の願い事」という俗信は、江戸時代以前には存在しなかったのではないか。」としており、明治以降に西洋から伝わった可能性が高い。日本国内で採集された「流れ星に願いごと」という伝承も（2章）、時代的にはそれほど遡らないのかも知れない。

現在、歌の歌詞やドラマの中で流星がロマンチックなイメージを伴って登場するのは喜ばしいことではあるが、一方でそれまでであった多様な流星の呼び名や見方が失われてしまった。さらに光害によって実際に流星を見たことがある人も少なくなり、流星との直接的なかわりも減ってしまったのは残念に思う。

## 参考文献

- [1] 内田武志,『日本星座方言資料』,日本常民文化研究所,1949
- [2] 三上晃朗,「星の民俗館」  
<http://www.click.or.jp/~mikami/index.html>  
(2006年4月現在、改装中で該当ページは見当たらない)。
- [3] 寺島良安,『和漢三才図会・一』,島田勇雄訳,平凡社,1985
- [4] 『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記』,犬養廉ほか校注,1983,小学館
- [5] 神田茂編,『日本天文史料』,原書房,1978
- [6] 渡辺美和,長沢工,『流れ星の文化誌』,成山堂書店,2000
- [7] 齊藤国治,『星の古記録』,岩波書店,1982
- [8] 広瀬秀雄,『年・月・日の天文学』,中央公論社,1973
- [9] 大野達之助,『日蓮』,吉川弘文館,1958
- [10] 藪内清責任編集,『中国の科学』,中央公論社,1975
- [11] 謝肇,『五雜組・一』,岩城秀夫訳注,平凡社,1996
- [12] 司馬遷,『史記・上』,野口定男ほか訳,平凡社,1968
- [13] Wikipedia,  
<http://en.wikipedia.org/wiki/Meteora>
- [14] フレイザー,『金枝篇・二』,永橋卓介訳,岩波書店,1951
- [15] プリニウス,『プリニウスの博物誌』,中野定雄ほか訳,雄山閣出版,1986
- [16] Ptolemy, “Tetrabiblos”, edited and translated into English by F.E. Robbins, Harvard University Press, 1940
- [17] ジャン・ピエール・ヴェルデ,『天文不思議集』,唐牛幸子訳,創元社,1992
- [18] 『聖書』,新共同訳,日本聖書協会,1987
- [19] Connecticut College's WETMORE PRINT COLLECTION,  
<http://www.conncoll.edu/visual/>
- Durer-prints/  
[20] 『コーラン』,藤本勝次責任編集,中央公論社,1970
- [21] 那谷敏郎,『魔の世界』,新潮社,1986
- [22] ヴァラーハミヒラ,『占術大集成』,矢野道雄・杉田瑞枝訳注,平凡社,1995
- [23] “World Archaeoastronomy”, edited by A.F. Aveni, Cambridge University Press, 1989
- [24] “Astronomy across Cultures”, edited by Helaine Selin, Kluwer Academic Publishers, 2000
- [25] ウノ・ハルヴァ,『シャマニズム』,田中克彦訳,三省堂,1971
- [26] オウピー,テイタム編,『英語迷信・俗信事典』,荒木正純ほか訳,大修館書店,1994